

「三ノ分目大塚山古墳」 おつかやま 利根川下流域最大の 前方後円墳

国道356号線を佐原から小見川方面に向かい、三ノ分目地区に入ると右手に大きな塚が見えます。これが三ノ分目大塚山古墳です。

昭和59年に測量調査、昭和61年に確認調査を実施した結果、墳丘全長123m、後円部の径68m、前方部の幅62mの規模で、周囲には盾形に堀が巡っていることがわかりました。これは、現在のところ利根川下流域最大で、県内でも十指に入ります。また、墳丘は3段に築かれ、各段には円筒埴輪列が確認されています。

円筒埴輪は、比較的薄手で大型のものであり、焼成の際にできた黒斑が見られます。作り方の特徴などから、県内では最も古い段階の埴輪に位置付けられます。

形石棺と呼ばれ、畿内では5世紀の大王や大豪族級の大型古墳に盛んに採用された形式です。長持形石棺とは、板石を組み合わせて作った石棺で、運搬の際に縄をかけたと思われる突起を作り出すのが特徴です。しかし、この石棺がいつ、どのような経緯で掘り出されたのか、副葬品は何があったのかなどは、残念ながらわかっていません。

本古墳は、墳丘の形、埴輪や石棺の特徴などから、5世紀中ごろに築造されたと考えられます。5世紀という時期は古墳時代中期にあたり、大

阪府の大仙古墳（仁徳天皇陵古墳）をはじめ、巨大古墳が全国各地で築造された時代です。香取地域においても、強大な勢力をもつ首長がいたことを物語る古墳といえます。おそらくは、霞ヶ浦や東京湾沿岸の首長と連携しながら、利根川下流域を治めていた人物の墓と考えられます。



▲三ノ分目大塚山古墳



▲石棺材(底石)

後円部の墳頂は共同墓地となつていますが、その傍らに、大きな板石が3枚立っています。これは、石棺に使われた石材で、底石には側石を載せるための溝や切り込みが見られます。この石棺は長持

問い合わせ
生涯学習課